青空の下 大学生が稲刈り体験

立正大の29人 君津市と大学連携

立正大学（本部・東京都品川区）の学生29人が21日、君津市の水田で稲刈りをした。同窓会に地元出身の役員がいることと、食育に力を入れる市の思いが重なり、今年から始まった取り組みだ。

この日午前、青空に稲穂の黄色が映える同市三直の水田に若者たちが集まった。学生らは、5月の体験会で手植えしたコシヒカリの稲を、市認定農業者協議会の指導を受けながら、鎌を使って黙々と刈った。

韓国からの留学生で文学部3年のユ・ヒョンソクさんは「稲に触れたときの触感が面白かった」。文学部2年で同市出身の山口冬花さんは「田植えから稲刈りまでに、いろんな人たちの力があってお米ができることが分かった」と話した。

思い思いのペースで稲刈りに取り組む立正大の学生ら＝君津市三直

「いろんな人たちの力があり、お米できる」

立正大同窓会副会長の加茂佳史さん(43)によると、以前は新潟県柏崎市で学生の農業体験を行ったが、コロナ禍で続けられなくなった。お米を買い取ることは続けていたが、農家の高齢化という事情から昨年限りになった。都心近郊で新たに農業体験の場を探す中で、白羽の矢を立てたのが自らの出身地の君津市だ。

昨年秋ごろ動き出すと、市が食育を重視し、認定農業者団体「市認定農業者協議会」が田植えや稲刈り、枝豆の収穫など農業体験を行ってきたことが分かった。

立正大にとっては持続可能な体験先で、市は首都圏の大学と連携できる。ウィンウィンの関係で一気に話は進み、今年から活動が始まった。

会場を訪れた立正大の北村行伸学長は朝日新聞の取材に「非常にありがたい。学生が色々な経験をすることは貴重だと思う」と話した。

（八鍬耕造）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。